
ある寄せ集めの話

二十日子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある寄せ集めの話

【Nコード】

N1709Y

【作者名】

二十日子

【あらすじ】

思いついた話しを詰め込みます。怪奇、ホラー、ファンタジーがほとんどになります。暇潰しにどうぞ。思いつきなので不定期更新になります。

呼び声〔青に沈む大海の王〕前編

空が薄い青を伸ばし、海が深い群青を波立たせる。

優美な帆船が帆を風になびかせ、穏やかな海の風景を描かせていた。

そこに男が一人、海に面する険しい断崖に立つてその様子を眺めていた。

湿った風が吹く。

「ピイイー」。男が右手の人差し指と親指を口に含み、甲高い音を鳴らす。

指をくわえたまま、空を仰いだ男の顔に影が落ちた。それに続く羽ばたきの音。

「ピョロロロ」。嘴が曲がった、赤茶けた猛禽が男の上に覆い被さるようにホバリングしていた。

手袋のようなものを着けた左手を、鳥に伸ばす。

バサリと羽の擦れる音をさせて、猛禽が左腕におさまった。

「ズズ、何が見えた。」男が左腕を動かし、正面に猛禽が見えるようにする。

『脈動する者。深い青の王。歌う者告げる。彼の者の声。呼ばれる。逆らえない。』猛禽が高い声で鳴く。

『呼ばれる。逆らえない。私逃げる。さよなら。』羽が開かれた。

「ズズ。」男が驚く。

『アナタ間に合わない。残念。ワタシ行く。』男の顔が青ざめ、羽ばたくズズを呆然と見上げた。

「待ってくれ。」男が手を猛禽に伸ばした時、前方でびちゃりと何かが音を立てた。

『彼の者眷属。』空の上でズズが鳴く。男が腰のナイフを取り出し構える。

青黒い、ぬめりを帯びた生き物がズルズルと這い寄って来ていた。

男のナイフを握る手はガタガタと震えていた。彼は戦士ではなかった。

青黒い生き物は断崖を上り、どんどん増えていく。

「ズズ！逃げるのは構わない。本部へ知らせを！」男が高くなった声で叫んだ。

『間に合わない』

男の足が飲み込まれた。焼け付くような痛み、足が崩れて青黒い塊の中に沈み込んでいく。

「ズズ……。」男の顔が飲み込まれた。

青黒い生き物はさらに空の上の鳥をも捕えようと触手を伸ばしたが、ズズは高く舞い上がり逃れた。

猛禽が輪を描いて飛ぶ。海を走っていた帆船が消えている。

『彼の者来たれり。』

不吉な言葉を残して猛禽は飛び去った。

「それは本当なのか。」暗い、光の差し込まない部屋で男達が言葉を交わしていた。大きなテーブルがあり、それを囲むようにして十数人の大人が立っている。

「本当も何も・・・、すぐに思い知ることになるでしょう。」地味な服を着る痩せた男が、心ここにあらずといった様子で述べた。

「何だと！この街の守りは堅牢だ。早々破れるものではない。」青い制服を着た男が怒鳴る。腰には剣が提げられていた。

「彼の者は王。一度怒りを買ってしまったからには、もう破滅を逃れる手段はないでしょう。」痩せた男が虚ろな目で突っかかる男を見た。

「ゴーラ落ち着け。先見よ、怒りを買ったとは何の事だ。」紺色の服を着る立派な髭の男が、困惑を隠せず尋ねた。

「尾鰭持つ海の女を、私達は捕えましたね？」

「それがどうした。」髭の男が先を促す。確かに一週間前、女に似た下半身が魚になっている化け物を捕まえていた。

「彼女は海の司祭、王に仕え彼等の神の言葉を伝える役目を負っていました。」

「馬鹿な、化け物共に王など、まして神などいるものか。」

「あれと私は言葉を交わした。これはあれが言ったことです。」場に沈黙が落ちる。皆目を剥いていた。

「私は彼女を逃がそうと思っていた。しかし、必要ないと返された。」ドントと青い制服の男がテーブルを叩いた。怒りで顔を真っ赤にしている。飛び掛かりそんなその男を制し、髭の男が険しい顔で先見に話しを続けるよう促す。

「彼女は迎えが来るから必要ないと言った。今朝の事です。もう全てが遅い。」痩せた男が渾身の力で殴り倒された。それを周りの男達が侮蔑を込めて見る。

「皆海岸の警戒にあたれ。今日はもう船を出さないよう触れを出せ。」

「この男の言う事を信じるのですか！」先見を殴った青い制服の男が言った。

「用心するに越したことはない。」髭の男の顔は険しい。周囲の男達は頷くしかなかった。

先見の男は拘束される。殴られても痛みを感じる様子がない。それを見るに嫌でも不安が増すのを感じた。

呼び声【青に沈む大海の王】 後編

先見が部屋から連れ出された直後、激しい鐘の音が街中に響いた。

「何が起きた！」部屋に飛び込んできた巡回兵に、ゴーラが怒鳴るようにして言った。

「青い、青い物が街中に。」カタカタ震えて明瞭な答えが返って来ない。

「青い？それは何だ！何が起きている。」泡を吹きかねない様子でゴーラはまくし立てる。

「落ちつかんか、ゴーラ。」低く、威圧感のある声がそれを諫めた。ゴーラと兵士がビタリと口を閉ざし、髭の男に向いて直立不動になる。

「青い物とは何だ。」髭の男が聞き直す。

「それは、海の方からやって来たヘドロのようなものです。」震えを抑えて兵士が喋り始めた。

「矢を射つても、切りつけても効果はなく一緒にいた仲間はソレに体を溶かされて死にました。次から次へと海から上がってくるのです。もう街にも・・・」恐怖に耐え切れなくなったのか、兵士が両手で顔を覆った。

「第四剣隊は民を避難させる。第一剣隊は敵の様子を探れ。それ以外は目下待機しろ。戦闘はなるべく避け、打開策が見つかるまでは手を出すな。」命令した髭の男は苦い顔をする。警戒する間もなく襲撃は始まった。兵士の様子を見るに街は混乱しているのだろう。鐘の音が神経を荒立てる。髭の男は傍目には落ち着いて見えた。しかし、それとは裏腹に焦燥感が男を支配していた。

「ぎゃっ」閉められた扉の向こうで悲鳴が聞こえた。髭の男が顔を引き攣らせる。

青い物が扉の下から染み出していた。

「ギヤーツ、ギヤーツ。」耳障りな声を立てて、報告に来た兵士が扉から遠ざかる。この兵士を青い物は執念深く追って来ていた。

びちゃり。青い物が部屋の床を浸す。戦く男達、灼熱感が足裏を覆う。男達は足を溶かされ床に身を投げ出した。それを青いのは待ち受けていた。じゅくじゅくと音を立てて、青いのはそれらを溶かした。

拘束された男は、いまは自由になっていた。なぜかというと彼を捕えていた兵士が青い物に溶かされたからだ。

街中を浸す青い物質。不思議な事に先見は青い物に溶かされなかった。

あんなにうるさかった悲鳴や鐘の音が止んでいる。

フラフラと先見が歩きだす。海の女が捕えられた領主の館の方へ足

が自然に向いた。

青い物の中をびちゃびちゃと音を立てて進む。

やがて、大きな屋敷の前に着く。彼を見咎める者はなかった。男がびちゃびちゃと立てる足元の音以外、一切が静かだった。

ギイと扉を開ける。以外な事に目の前の広いエントランスにその女はいた。

青い者は女の周りであうねっている。

『帰る。早く。手伝って。』女が先見へ手を差し伸ばす。

『助けは必要ない、アナタ言った。』先見が人外の言葉で応える。

『貴方気に入った。連れてく。』女が笑う。ゾロリと生える鋭い牙が見えた。

『私行けない。海合わない。死ぬ。』先見は断る。女がキョトンとした顔になった。説明が更に必要だと感じて男が続ける。

『海息できない。アナタワタシ違う。』

『息できない。』

『ソウ。風、空気必要。』正確に伝わったかは分からないが、無理だということも女に伝わったようだった。

『別れ悲しい。送って。』手は伸ばされたままだ。先見はその手を

取る。

青い物が力強くうねって女を移動させる。男は手を取ったままその動きに合わせて歩く。

街中を満たす青い物が、彼女に合わせ潮を引くように海の方へ戻るのを足の感触で先見は感じた。

港へ近付いていた。強烈な生臭さと共に、大きな青い塊が前方に見える。

『アーアー、王。迎え、ワタシ嬉しい。』バタバタと女が尾鰭を振る。

やがて青い巨大な塊の全容が見えた。百の目のようなものを持つ、いくなればマッコウクジラに似た形のものが青い物に満たされた船着き場に身を浮かべていた。あまりの大きさに先見がのけ反る。

『王。』女が言うつと返事を返すようにソレがポォーと音を立てた。

それからたちまちその身を沈め始める。青い物が渦を巻いて従う。女も先見の手を離して渦の流れに乗り、王の傍にいくとその胸鰭にしがみついた。

先見は足元を擦り抜けていく青い物を気にせずその光景に魅入る。

ポォー

その音を最後に巨大な王がその体を海に沈めた。

一時間にも満たないできごとだった。

一人を残し、無人になった街に鳥の音が響く。

先見は立ち尽くし、海を見続けた。

それから後、そこは呪われた街として近づく者はいなかった。ただ迷い込んだ船が時々訪れる事があって、それが伝えるには男が一人岸辺に立っていつも海を見つめているそうだった。

何時か誰が聞いたかは知らない。迷い込んだ船乗りの一人が、物好きにその男に尋ねて、何しているかと聞いたそうだった。

すると男は声が聞こえると応えた。船乗りには当然何の音も聞こえなかった。気味が悪くなってそれで降話し掛けるものはいなくなっただけだ。

ある港街の怪より

呼び声【青に沈む大海の王】後編（後書き）

設定一部

青い物は貝の中身みたいな生き物です。今回は王の命令で形を崩す魔法を使い、スライムみたいになっていました。火が有効ですが、こつ多いと抵抗虚しいですね。ちなみに食べれます。味は貝・・・。

幽界の馬

ははははっー！

笑い声

手に剣を掲げる兵士の群れ

ぐちゅり

粘着質な音が足元で起こる。

「ポケツとすんなライハルト。」前に行く兵士が、こちらに呼び掛けた。私は足元の物体を蹴り、剣を引き抜く。

「ねえ、貴方。あの子と親しいのかしら。」剣には血がべったりと付き、切りつけるには些か不便になっているようだ。そうした剣を見ていると、傍で鈴の転がるような声が聞こえた。

私は首を振る。指されたのはライハルトと名を呼んだ兵士のことだろう。

「そう。」子供が笑う。戦場に不似合いなあどけない顔に反し口調は大人びていた。

「あの子は死ぬわ。」口ずさむように、死神の言葉を告げる。

流れ矢が、剣の打ち合う音に紛れて飛んだ。

運の悪い兵士の首に深々と、その切っ先を埋め込み膝を折らせた。

「ほくらね。」無邪気に笑う子供に警戒し、剣を構えて距離を取る。

「敵か？」問い掛けを放つ。

「違うわ。」間髪入れず答えが返ってくる。

「貴方の傍が安全なもの。それ以外は地獄行き。だから私、貴方から離れないわ。」コロコロと笑う子供。

「来たぞ！死馬の戦士だ！固まれ、盾を構えて押し返せ！」人ならざる者と盟約を交わし、敵国ユウリスはリア国を攻めて来た。

なだれるように駆けてくる、肉の削げ落ちた幽界の馬。その背に乗るのは蒼い顔のユウリスの兵士だ。

体の芯が熱せられる。子供の存在を無視して駆け出した。

幽界の馬は足を踏みならし、ぐちゃぐちゃと兵士の体を肉塊に変えていく。空洞の目にオレンジの火が灯り楽し気に揺らめく。

固まった兵士が盾で攻撃を防ごうとしているが、蹄に打ち抜かれてよろけた隙を敵国の兵に討ち取られ戦力を削られていた。

じりじりと味方が減っていく。

ライハルトは駆け出した勢いに乗り、盾を構えた敵国の兵士の頭を

踏みつけた。ゴキリと骨の音がするのと共に空中に飛び出し迷う事なく刃を幽界の馬の頭部に振り下ろす。

ほとんど骨が剥き出しになった馬が、鳥のようなけたたましい声を上げ暴れる。傷を負わせたもののライハルトの剣は碎けてしまい、また不安定な姿勢で切り付けたことで彼は受け身もとれず地面に転がった。

味方の兵士が錯乱した幽界の馬に殺到しとどめを刺す。

ライハルトは打ち所が悪かったのか身動きが取れず戦の様子を眺める事しかできなかった。

「見てなさい。ほうら、あちらもそちらも人で無し。ねえライハルト。」一人残されたライハルトの耳に子供が顔を寄せる。

幽界の馬は一頭ではない。数十の群れが遠くに駆けている。

そして

リア国の方からは、赤い大きな獣が飛び出す。長い鼻に湾曲した牙を持つていた。

それからは悪夢のようだった。最初は敵味方の兵士が入り乱れて戦っていた。しかし、暴れる赤い獣は味方共々火炎の息で焼き尽くし、踏み潰した。幽界の馬が屍を踏み鳴らす。生きていてもお構いなしに。狂気が渦巻き、もはや何を相手に戦っているのか判別もできない。

やがて、戦場に残ったのは幽界の馬数頭と、赤い獣。人に類するものは屍に変わり、地の肥やしとなった。

「くすくすくす。」

「お前は魔女か？妖魔か？」

「あら、違うわ。私は運命を視る渡り人。」

「こんな子供のなりをしているのはまやかしか。」

「いいえ、私は前世の記憶を引き継ぐの。年相応の体よ。」

ガーンと大地が揺れる音がして、炎の柱が上がる。赤い獣の体が燃え、火柱の中で身を崩していく。

ははははっー！

きゃきゃきゃきゃー！

二重の笑い声

「くすくす。幽界の王も炎界の王もご満悦。楽しんだようね。」
「焼け野原を子供が歩く。」

その背をライハルトは痛む体に鞭を打って追いかけた。勿論これも運命を視る渡り人の思惑の通りである。

大人が夜眠らぬ子供にネムアが攫いにくるぞと脅すが、このネムアというのはどうやらリア国滅亡の話しに出る幽界の馬そのものらし

い。真偽の定かでない与太話ではあるが。

幽界の伝承より抜粋

童歌「アカいおハナとオチたトリ」

空に咲く華真つ赤に焼けた

金色赤色お空に咲いた

白い鳥と黒い鳥

お空で輪を描きお華を枯らす

白い鳥と黒い鳥

混ざって灰色雨ザアザア

枯れたお華は山の向こう

鳥は灰色落つこちた！

乾燥地帯に伝わるたわいのない童歌である。しかし、迷信深い一部の民族は古しえの神話に絡めてこの歌を伝える。

空に咲く華は太陽神ヴィシャを示し、白い鳥黒い鳥は彼等の祖先であると信じられている。肌の黒い一族をバハ、肌の白い一族をフブ族と呼び、それぞれの祖先を肌の色にあった鳥として彼等は子孫に伝えている。

ならば灰色とは何だと問えば、数百年も前に途絶えた民、ソラの事だというのだ。ただこの灰という表現に関しての見方にはバラつきがあり、この童歌を雨季と乾季の移り変わりを表しているに過ぎないという見解が主流になっている。

民俗学者の手記より

童歌「アカいおハナとオチたトリ」（後書き）

設定一部

バハ族の肌の色は炭を塗ったような黒色。そして瞳の色にはグレーが多い。

フブ族の肌の色は白い大理石のような色。髪は灰色をした者が多い。

それぞれ交流を避けて暮らしているが、伝える神話は似通っている。

狼の歌

「オオオーン。」遠くから吠える声が聞こえてくる。

「オオーン。」それに応え唱和する声。

断崖の狭間に響く、狼達の遠吠え。

「オオオーン。」何処までも続く山並みに、そこかしこから響いていった。

蒼毛の狼が身を踊らせる。獣道を通り、他の獣を威かしながら。

真っ青な瞳が川面のよういきらりと光り、土を踏み締める脚が軽やかに交差する。

「オオオーン。」

高々に響く声に、風が混じり草木がうねる。

世界に目覚めを齎す狼。その声に地上の風が喜び踊り、その声に地に伸びる草木がざわめく。

足を止め、大木の合間から差し込む陽光を蒼毛の狼が一身に浴びた。

「オオオオーン。」歌う狼達。地上の風が彼等の声で、その体が草木である。

狼がまた走りだした。世界は目覚めていく。彼等は喜び歌う。その

後に風が草木がざわめきを残す。

蒼毛の狼は世界を駆け巡っているのだ。

世界がまだ造られて間もない頃、地上は深い霧に覆われていた。その時代、まだ人の姿はなく力ある者が世界を駆け巡り様々な事象を巻き起こした。そうして今の世界を形作つたと神話には語られている。この蒼毛の狼はその創世の者の一つに数えられていた。昔はこうした力あるものの姿を見掛ける事は珍しくなかったそうだ。

蒼毛の狼の神話

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1709y/>

ある寄せ集めの話

2011年11月20日19時12分発行